

シリア難民水衛生支援事業（レバノン）中間報告

国際医療救援部 国際救援課 李壽陽
(派遣期間：2018年3月～2019年3月)
(報告日：2018年10月12日)

2018年3月にレバノンへ派遣され、気づけば6ヶ月が経過しました。もっと早くに現地からの「声」を届けるべきところ、着任した頃の春の季節はいつの間にか夏を過ぎ秋に移ろうとしています。

大阪赤十字病院に入職してから五度目の派遣となりましたが、初めての中東、初めての一年という期間の派遣で、まだまだ戸惑うことも少なくありません。ましてやレバノンはたいへん複雑で魅力的でもある国で、率直にこの一年間でレバノンの抱える事情すべてを理解することは難しいだろうと感じています。

私は現在レバノンで、首都ベイルートにオフィスを構え、事業管理要員として日本赤十字社（以下、日赤）のシリア難民を対象とした水衛生支援事業および学校改修事業、パレスチナ難民を対象とした医療支援事業の三つの事業に関わっています。それぞれが日赤の中東支援のフレームワークにおいて重要な事業ですが、今回は、日赤が2015年から支援を始め、今年度が四期目となるシリア難民水衛生(WASH)支援事業についてご報告いたします。

2011年に勃発した「シリア危機」から七年。人口約400万人といわれる岐阜県サイズの小国レバノンに、東隣の国シリアから100万人を超える難民が流入しました。日本では想像しづらいことと思いますが、レバノンにはそれ以前からパレスチナ難民がパレスチナから流入していることもあって、レバノンの人口の四人に一人が難民といわれています。この結果、レバノンは人口に占める難民の数が世界で最も多い国¹とされます。

紛争下のシリアを逃れてレバノンで暮らすシリア難民のうち、17%は現在もレバノン国内各地に点在する非公認居住地（ITSs: Informal Tented Settlements）と呼ばれる、いわゆる「難民キャンプ」で、テントでの生活を送っています²。日赤は、そのようなシリア難民の方々へ水・衛生分野の支援を提供するため、今年度はハズバヤ地域とラシャーヤ地域、それぞれ二カ所の合計四カ所の事業地でレバノン赤十字社とともに活動しています。（次ページ地図参照）

¹ UNHCR, Global Trends Forced Displacement in 2017 <http://www.unhcr.org/globaltrends2017/>

² UNHCR, Vulnerability Assessment of Syrian Refugees in Lebanon - VASyR 2017
<https://data2.unhcr.org/en/documents/details/61312>



左：レバノン共和国、右：レバノン国内の水衛生支援事業地ラシャーヤ地域とハズバヤ地域
(UNHCR, Lebanon Information Hub, Map Hub <http://data.unhcr.org/lebanon/>)

具体的にこの事業では、一滴の雨も降らない夏の土壌が乾燥している期間を利用して、トイレや生活用水タンクを各世帯に一基ずつ設置し、下水処理設備を含む ITSs の水インフラ環境を整備します。さらに、近隣地域出身のレバノン赤十字社のボランティアが、感染症や害虫駆除、ごみ処理と管理などをテーマに、定期的に衛生教育を実施します。これらの活動により、事業対象地域の衛生状況の向上、関連疾患のリスク削減、さらにはコミュニティのレジリエンス向上に寄与することを目標としています。

9月26日(水)に、トイレと生活用水タンクの設置を約二週間前に終えたばかりというラシャーヤ地域の事業地二カ所を訪れました。(下写真：ラシャーヤ地域にあるシリア難民キャンプ1)





ラシャーヤ地域にあるシリア難民キャンプの様子 2

設置から二週間が経過したばかりであったこともあり、確かにきれいなトイレが設置されていました。このキャンプには、足の不自由な方へ配慮したトイレも二基ありました。水インフラ設備 (Hard WASH) を担当するレバノン赤十字社のカリルは、ここ数年間をほとんど毎日レバノン各地のシリア難民キャンプを巡り、過ごしていることもあり、現場の現状把握と品質管理にたいへん長けています。



事業を通じてシリア難民キャンプに設置されたトイレ

カリルとともにキャンプを歩いたところ、きれいなトイレ付近に大量のハエが飛び交い、不思議に思いました。よく見るとトイレの周りに人糞がみられます。まだ幼い子どもたちが、新しくきれいなトイレを使用していない可能性が考えられました。子どもたちがトイレの使用を怖がったり、ご両親が農作物の収穫作業等³のため日中にキャンプを不在にして子どもの面倒をみてくれる人がいなかったりと、

いくつかの理由が考えられました。新しくきれいなトイレの設置だけでは支援として決して十分とはいえ、並行して粘り強い衛生促進活動が必要だと感じられました。新しく設置されたトイレをどのように使い、管理すればよいか、新しく設置されたトイレの利用と手洗いがなぜ大切なのか、衛生環境が劣悪だとどういった経路でどのような病気になってしまうのか、どうすれば感染を防ぐことができるのかなど、各ご家庭に少しずつ理解を深めていただくことが地域の衛生状況の改善に繋がります。



レバノン赤十字のスタッフ、ボランティアから話を聞く

本事業の事業地は、ITSs で生活を送るシリア難民の方々を対象にしていることからシリアやイスラエルとの国境に程近く、首都ベイルートから毎日のように事業地へ足を運ぶことは困難です。

次回、おそらく冬にラシャーヤ地域を訪問するときには、事業を通して設置されたトイレや生活用水タンクが今よりもよいかたちでシリア難民の方々に活用されていることを期待しています。また、限られた事業地訪問の機会を通して実際に目にしたことを、より多くの方々に知っていただけるよう、積極的に発信していきたいと思えます。

今後とも、日本赤十字社の国際活動にご支援を賜りますようお願い申し上げます。

(次ページは、ラシャーヤ地域以外の事業地訪問時に撮影した写真三枚です。)

³シリア難民は、レバノン国内で厳しい就業制限があるが、建設業と農業分野の就労は認められている。UNHCR, Vulnerability Assessment of Syrian Refugees in Lebanon - VASyR 2017
<https://data2.unhcr.org/en/documents/details/61312>



7月11日（水）、ハズバヤ地域訪問時に出会ったシリア難民の子どもたち



10月4日（木）、レバノン北部アカー地域の ITS を訪問



10月4日（木）、レバノン北部アカー地域の ITS を訪問